

幼児初期の仲間関係の発達

—18ヵ月時の観察資料の分析—

教育心理学研究室 武 井 澄 江

” 平 直 樹

Development of Peer Relationship among Toddlers: An Analysis of the Observations at 18 Months Old

Sumie TAKEI and Naoki TAIRA

The importance of the peer relationship has been discussed since 1970's, as a part of the development of the infants' social skills to interact with others, which had been almost disregarded for the past 30 years. While a great amount of evidence has been provided to support the fact that young infants such as toddlers do interact with peers, some new issues have been coming up. One of them is what condition can facilitate their interaction. In particular, we have received several different points on the role of toys in the interaction of toddlers. We undertook an observational study of young infants to focus on this point. 16 home fostered subjects in 8 pairs at the ages of 18, 21 and 24 months old were observed in the 3 different toy conditions (with no toys, portable toys and non-portable toys) in the playroom free-play situation in 1985-6. Each infant has a same-sex, same-age, unfamiliar peer as its partner.

The present paper is our first report of this project. We analysed a part of 18 months olds' data. These were the time-sampled data of the toddlers' peer-oriented behaviors and the minute note records of their interactions. The conditional effects to their behaviors and interactions, especially to their intentions to initiate interactions, were discussed.

I 問題

乳幼児の社会性の発達に関する研究は、長い間——1940年代から1970年代に至るまでのおよそ30年間——母子関係に限定され、子ども同士の関係 (peer relations) がとり上げられることはほとんどなかった。これには、母子関係の重要性を説く有力な理論、すなわち、「乳幼児期の母親との関係が後の全ての対人関係の基礎となる」という Freud の精神分析理論や「飢えや寒さといった動因の低減こそが子どもの対人関係を成立させるのであり、その担い手は母親である」とする行動主義理論の隆盛が大きく影響していたと考えられる。また、1930年代に主に乳児施設で行われた仲間関係の古典的研究の多く (例えば Maudry & Nekula, 1939) が、「少なくとも2歳以前の子どもは peer に無関心であり、peer を物と同じようにみなしたり、物に対する妨害物とみなす」

といった peer 間には社会性を促進するような社会的な交流は生じえないとする結論を導き出していたことも見逃せない。子どもは無力で受身的な存在であり、同輩の子ども (peer) が子どもの社会化に影響を及ぼすはずはないと考えられた。そして社会化の担い手、外的要因としての母親の役割のみが問題とされたのである。

しかし、30年のブランクの間に、乳児研究、認知発達研究が進むにつれて、乳幼児が単にこれまで考えられていたような受身的存在というよりも、より能動的な存在であること。一方的に働きかけられるのではなく能動的に自ら環境とかかわっていくものであること。そしてそのような環境との相互作用を展開していく中で発達していくものという捉え方がなされるようになってきた。母子関係を中心とした社会性の発達研究でも、1970年代に入ると、こうした乳児研究、認知発達研究の影響を受け、また方法論的には比較行動学からの刺激を受けて、母子の力動的関係が扱われるようになった。そしてそれらの

母子相互作用研究の中でさらに子どもの能力が評価されることにより、70年代後半以降、母子に限らず、それ以外の対人的相互作用 (Lewis, 1975; Lamb, 1976), 中でも、子ども同士の peer relationship を見直そうという動きが活発になってきた (Mueller, 1979)。

特に、米国においては、母親の就労による乳幼児保育の増加とも相俟ってここ10年間に乳幼児における peer relationship 研究は急増し、様々な研究結果が集積しつつある。研究用具の進歩 (VTR 等の開発), 行動測度の進歩・観察状況の改善 (比較行動学的方法の導入による言語に限定されない行動指標の設定や自然な場面設定) とも関連して、その研究結果のおおよそは「2歳以前の子ども同士にも相互交渉は成立する」といったものであり、1930年代の結論を全面的に覆すものとなっている。最近の研究の主眼点は peer の相互交渉は成立するの可否かといったものではなく、peer 間の相互作用を規定する条件としての、場面状況 (家庭か、保育園か、実験室か), peer との遊び経験, 親しさ, 物の介在, 大人の介在といったものの検討 (Howes & Rubenstein, 1981; De stefano & Mueller, 1982 等) や peer 間の相互作用と母子相互作用の関係についての検討 (Eckerman et al. 1975; Vandell, 1980 等) に向けられている。日本でも、米国での研究の影響を受けつつ、この数年間に peer relationship 研究は進展してきている (江口 1979 他)。ただ、それらの研究結果からは、統一された結論が提出されているとはいえない。

例えば、物の介在に関して Mueller & Lucas (1975) は object-mediated behavior ということばで定義しているように、物が相互交渉を促進することを示したが、Lewis (1975) は物の役割はあまり重要でないと結論づけている。こうした矛盾する結論の背後には研究における分析単位の問題があると考えられる。たとえば peer relationship といっても個別行動 (social behavior) を扱うのか相互作用を扱うのか、また相互作用として interact (↘) をみるのか interchange (↘↗↘) をみるのか、さらに相互作用においては随断性が問題なのか、因果性が問題なのか、個別行動 (social behavior) としてはどのような測度を設定するのか、Mueller の提出した視線を中心とした SDB を用いるのかといった問題である。これらの分析単位の検討は相互作用研究では充分になされる必要がある。

本研究は、1歳半の家庭児ペアを複数組、プレイルームにおいて6カ月間縦断的に観察し、幼児初期の子どもの peer relationship の成立過程を、個別行動と相互作用

(interact と interchange を含めて) の両面から明らかにしようとするものである。子どもの相互作用の構造および内容を分析し、その発達的变化を明らかにするとともに、それが個別行動の発達とどのようにかかわっているかを検討していく。この際分析単位に関する吟味も行う。なお、日本では、乳幼児保育の増加と関連して保育園児での研究は数多いが、家庭児での研究は少ない。一般家庭で養育される子どもたちの仲間関係を研究することも重要と思われる。peer relationship を規定する条件としては、家庭児にとっては最も重要と思われる物の存在とその種類及び母親の介在の二条件を考慮する。

一本報告での目的は以下の通り—

18か月時における peer 間の相互作用の構造面の様相および個別行動の様相を明らかにする。特に、物の存在・種類がこの時期の peer 間の相互作用及び行動に及ぼす影響に焦点をあて、検討していく。

II 方法

A 観察対象及び期間

男女児各8名、計16名を、同性で互いに未知であり月齢差が1カ月未満であることを条件に、2名ずつのペア計8組をつくり、生後18カ月、21カ月、24カ月の時点で各1回ずつ、東京大学教育学部内の実験室 (プレイルーム) において観察する。表1に示すように、第1回目の

表1 分析資料と被験児 (生後18カ月時)

被験児	ペアの 日令差	出生順位	セッション			
			(C-C)			(M-M) (C-C)
			1	2	3	4
(男児)						
E.F. M.D.	4D	1 1	(NP)	(O)	P	P
I.T. S.A.	13D	2 (兄) 1	(NP)	O	P	P
K.G. N.S.	12D	1 1	(P)	O	NP	NP
S.D. T.S.	8D	1 1	(P)	O	NP	NP
(女児)						
D.M. N.M.	1D	1 1	(P)	(O)	NP	NP
H.N. S.A.	20D	1 1	(NP)	O	P	P
I.M. M.Y.	29D	1 2 (姉)	(NP)	O	P	P
M.M. U.C.	9D	2 (兄) 1	(P)	O	NP	NP

注 マルで囲ったデータが逐一筆記記録法により分析されたもの。又、斜線を引いたデータがチェックリストにより分析されたものである。

観察において、ペアの日齢差は平均12日（1日～29日）であった。

被験児は、すべて東京都文京区内に在住しており、16名中男児7名女児6名が第1子、残りが第2子である。主な養育者は、すべてのケースにおいて母親である。これらの被験児は、研究目的が「仲間関係の発達」であること、母親と一緒に実験室まで出向くこと、その他の条件を、母親が承知して協力を申し出たものである。同輩及び若干年上の仲間との遊びの経験は、個々のケースにより様々である。

尚、第1回目の観察を行う2日～13日前に、実験室とおもちゃに慣れるため、すべての被験児は本実験と全く同じ場面条件の下で、各1度ずつ母親と2人の自由遊びを経験した。

B 観察方法

1. 場面

観察は3カ月に1回、実験室に各被験児をペア毎に迎えて行う。原則としてペアの組み替えは行わないが、ペアを組んだ2名の相互の日程が合わない場合、一方が遠方に転居した場合など、やむを得ない事情がある場合には、適宜ペアの組み替え、被験児の補充を行うことも有り得る。

実験室内には、図1に示すように、各場面条件におい

て用意するおもちゃ以外に、カーテンをかけて中を隠したおもちゃ収納棚6個、洗面台と鏡、縮めたアコーディオンカーテン、ラジエーター、窓等があり、床にはカーペットが敷かれている。実験室の広さは、約5.4m×約5.6mである。

実験室内には、2名の被験児の外に、被験児の母親たち、女性の観察者1名計3名の大人が同室する。この3名は、母親が参加する第4セッションを除いて、被験児に一切の社会的働きかけを行わないことを原則とする。又、観察者は、被験児らの行動を自由記述方式で記録するとともに、各セッションの開始及び終了の合図を行う。

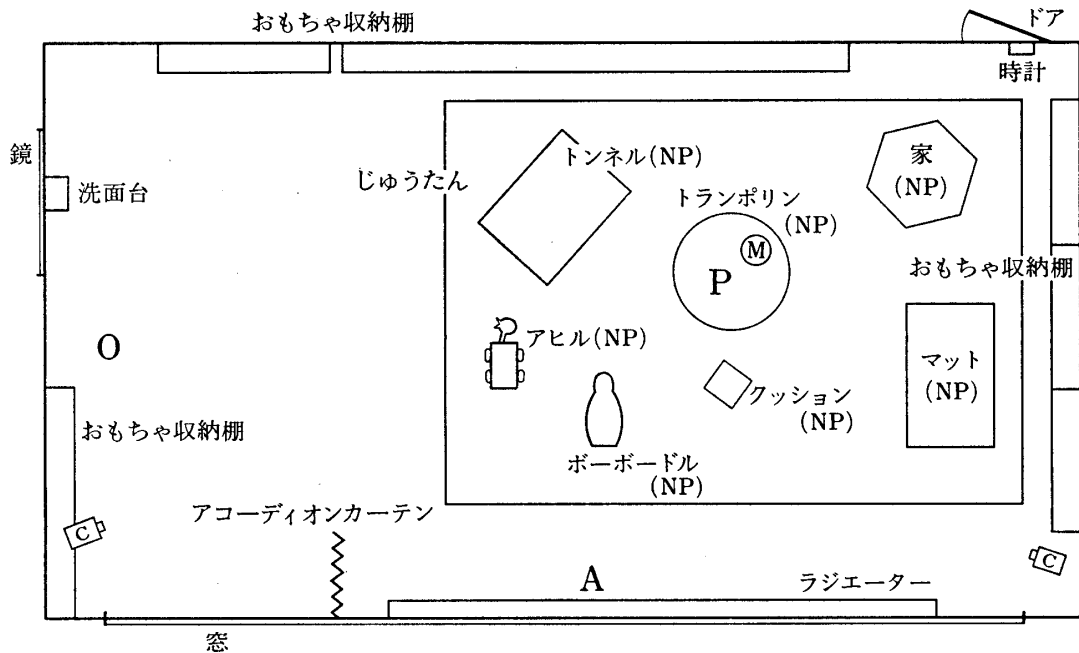
1回のセッションはそれぞれ10分間である。各セッションは連続して行い、休憩時間はとらない。

実験室内の様子は、室内天井に取りつけられた2台のカメラ（移動カメラ1台、固定カメラ1台）と集音マイクを通じてモニター室に送られ、VTRに集録される。分析は、主にこのVTR録画に基づいて行われる。

母親に対する教示は、以下に述べるような内容である。この教示は、実験が始まる直前に、別室において、口頭で伝えるものとする。

お母さまへのお願い

——プレイルームでは、次のように行動してくださいますようお願い致します——



- A: 母親の位置
- O: 観察者の位置
- C: カメラの位置
- M: マイクの位置
- P: P条件のおもちゃの位置

図1 実験室内見取り図

- ①プレイルームに入室した後は、図1のAの位置に座ってください。尚、お子さんがお母さまにくっついてくるようなら、最大3回まで、「お友だちと遊びなさい」と言ってお子さんを押し出してください。
- ②最初の30分間は、お母さま同士は自由にお話ししていただいてもかまいません。ただし、小さな声でお願い致します。お子さんに対しては、危険な時や、お母さまが特に必要を感じる時以外は、お母さまから一切働きかけないでくださるよう、お願い致します。お子さんの方からお母さまに働きかけてきた時には、受容（物を受け取る、うなずく、ほほえむなど）することはかまいませんが、受け取った物はお子さんに返さずに、膝の上にでも置いておいてください。また、言葉で応ずることは、なるべくなさらないでください。
- ③30分経過した時、こちらで合図をいたしますので、合図の後には、お子さんが相手のお子さんとよく遊べるように、お母さまが働きかけてください。御自由に動いていただいてけっこうです。また、何をしても、何を話しかけてもけっこうです。

実験は、以下に述べる3種類の場面条件の下で行うこととする。

a. P条件

原則として持ち運びが可能で、主に手先の使用が要求されるおもちゃ (portable toys) が置かれる条件。8種類のおもちゃが用意される〔ままごとセット (コップ、茶わん、スプーン、はし、皿、各1個)、木製積木 (16個)、人形 (被験児の性別に合致した布製小型人形1個)、電話1台、ビーチボール1個、象のビニール人形1個 (押すと音が出る)、おもちゃのピアノ1台、絵本1冊〕。これらのおもちゃは、図1に示すように、実験室の中央

付近にかためて置いておくこととする。

b. NP条件

原則として持ち運びが困難であり、主に全身の使用が要求されるおもちゃ (non-portable toys) が置かれる条件。7種類のおもちゃが用意される〔ソファのクッション、寝台用マット、円型トランポリン、アヒルの乗り物、段ボール製の家、段ボール製のトンネル、ポーポドール (漫画「ドラえもん」のキャラクター)〕。これらのおもちゃの配置は図1に示すとおりである。

c. O条件

この場面条件においては、何もおもちゃが用意されない。

実験は、表1に示すように各ペアともNP条件、O条件、P条件、又は、P条件、O条件、NP条件の順に行われ、最後に行われる場面条件の下で、引き続いて母親が参加するセッションが行われる。従って、1回の観察時間は、1セッション10分間×4セッションで計40分間である。尚、P条件から始めるペアは男女児とも各2組、NP条件から始めるペアも同数である。場面条件の転換の際のおもちゃの出し入れは、実験室内の観察者と外部からの手伝い1、2名が協力して手早く行う (ほぼ1分間程度必要)。その間の被験児らの行動は分析の対象としない。

2. 記録

各セッションの2名の被験児の行動は、次の2方法で記録する。

a. チェックリスト法

表2に示した139項目からなるチェックリストを用いる。観察者は、VTR画像を通じて、10秒毎に、その時点で観察される被験児の行動のうち、あらかじめ定義さ

表2 チェックリスト項目

〔視線〕		13	(M)	母親が触れている Toy を見る。
1 注視・人	(P) Peer を見る。	14	(M')	Peer の母親が触れている Toy を見る。
2	(M) 自分の母親を見る。			
3	(M') Peer の母親を見る。	15	その他 (✓)	誰も触れていない Room fixtures (室内にあるToy以外の物全て) や窓の外を見る。
4	(O) 観察者を見る。			
5	(S) 自分の身体の一部を見る。			
6	(Ⓜ) 鏡に映った Peer を見る。	16	(S)	自分が触れている Room fixtures や窓の外を見る。
7	(Ⓜ) 鏡に映った自分の母親を見る。			
8	(Ⓜ) 鏡に映った自分自身を見る。	17	(P)	Peer が触れている Room fixtures や窓の外を見る。
注視・物				
9 Toy	(✓) 誰も触れていない Toy を見る。	18	(PS)	Peerと自分が触れている Room fixtures や窓の外を見る。
10	(S) 自分が触れている Toy を見る。			
11	(P) Peer が触れている Toy を見る。	19	(M)	母親が触れている Room fixtures や窓の外を見る。
12	(PS) Peer と自分が触れている Toy を見る。			

表 2 つづき

20	(M')	Peerの母親が触れているRoom fixtures や窓の外を見る。	48	(M)	母親に対する受容。
21	(O)	観察者のもっている物を見る。	49	快	(/) ほほえみ, 笑い顔など表情による快の表出。
22	開眼	(/) 対象が不明確 (1~21につけられないもの)。			* 42と49の原因, 対象が明白な場合は, その「物」「人 (M, P, それ以外)」の別をつける。
	[口]			[手・腕]	
23	指を吸う	(/) 指・手を吸う。		指さし・人	
24	Toyを吸う	(/) Toyを吸う, なめる, かむ。	50	(P)	指がPeerに向いている指さし。
	[発声]		51	(M)	指が母親に向いている指さし。
25	泣き	(/) 声をたてて泣く。	52	(M')	指がPeerの母親に向いている指さし。
26	むずかり	(/) 不快な声を出す。	53	(O)	指が観察者に向いている指さし。
27	発声・人	(/) 29, 31, 33, 35以外の場合の喃語・原初語などの日本語になっていない発声。	54	(S)	指が自分の身体に向いている指さし。
29	(P)	明らかにPeerに向けた発声。	55	(Ⓟ)	指が鏡に映ったPeerに向いている指さし。
31	(M)	明らかに自分の母親に向けた発声。	56	(Ⓜ)	指が鏡に映った自分の母親に向いている指さし。
33	(M')	明らかにPeerの母親に向けた発声。	57	(Ⓢ)	指が鏡に映った自分自身に向いている指さし。
35	(O)	明らかに観察者に向け発話た。		指さし・物	
28	笑い・人	(⊙) 30, 32, 34, 36以外の場合の笑い声。	58	Toy	(/) 指が人が触れていないToyに向いている指さし。
30	(Ⓟ)	明らかにPeerに向けた笑い声。	59	(P)	指がPeerの触れているToyに向いている指さし。
32	(Ⓜ)	明らかに自分の母親に向けた笑い声。	60	(M)	指が母親の触れているToyに向いている指さし。
34	(Ⓜ)	明らかに相手の母親に向けた笑い声。	61	(M')	指がPeerの母親の触れているToyに向いている指さし。
36	(Ⓢ)	明らかに観察者に向けた笑い声。	62	(PS)	指がPeerと自分の触れているToyに向いている指さし。
37	発話・人	(/) 38~41以外の場合の日本語になっている発話。	63	(S)	指が自分が触れているToyに向いている指さし。
38	(P)	明らかにPeerに向けた発話。	64	その他	(/) 指が人が触れていないRoom fixtureや窓の外に向いている指さし。
39	(M)	明らかに自分の母親に向けた発話。	65	(P)	指がPeerの触れているRoom fixtureに向いている指さし。
40	(M')	明らかにPeerの母親に向けた発話。	66	(M)	指が母親の触れているRoom fixtureに向いている指さし。
41	(O)	明らかに観察者に向けた発話。	67	(M')	指がPeerの母親の触れているRoom fixtureに向いている指さし。
		* 27~41については模倣 (10秒を超えない直前のPeerの行動の全体あるいは一部を繰り返す) か否か, ゲーム (相互に役割をもった行動) か否か, 一方的ゲーム (相手がその意図がない為ゲームは成立してはいないが, ゲームを企図した行動) か否かの別をつける。			
	[顔および表情]				
42	不快	(/) 泣き顔, 怒りなど表情による不快の表出。	68	(O)	指が観察者の触れているRoom fixtureに向いている指さし。
43	拒否	(/) 44, 45以外の, いやいや (首ふり) 顔をそむけるなどの拒否の表出。また, 払いのける, 押し返すなどの手・腕による拒否も含む。	69	(PS)	指がPeerと自分の触れているRoom fixtureに向いている指さし。
44	(P)	Peerに対する拒否。	70	(S)	指が自分の触れているRoom fixtureに向いている指さし。
45	(M)	自分の母親に対する拒否。	71	つかむ・人・Peer	(/) Peerに対して意図的にさわる。(neutralな触れ方)
46	受容	(/) 47, 48以外のうなずくなどの受容, 承認の表出。	72	(⊙)	Peerに対して物を用いて意図的に触れる。(neutralな触れ方)
47	(P)	Peerに対する受容。			

表2 つづき

73	(な)	Peerをなでる。(positiveな触れ方)			
74	(㊤)	Peerを物を用いてなでる。(positiveな触れ方)		99	(M _L) 母親に対して象徴的遊びをしてみせる。
75	(ぶ)	Peerをぶつ、ひっぱる。蹴る、かみつく等も含む。(negativeな触れ方)		100	差し出す (✓) Peer, 母親以外の人に物を差し出す。
76	(㊦)	Peerを物を用いてぶつ、ひっぱる等。(negativeな触れ方)		101	(P) Peerに物を差し出す。
				102	(M) 母親に物を差し出す。
				103	受けとる (✓) Peer, 母親以外の人から物を受けとる。
				104	(P) Peerから物を受けとる。
				105	(M) 母親から物を受けとる。
				106	奪う (✓) Peer, 母親以外の人から物を奪う。
				107	(P) Peerから物を奪う。
				108	(M) 母親から物を奪う。
				109	抵抗 (✓) Peer, 母親以外の人から物を取るのに抵抗を示す。
				110	(P) Peerが物を取るのに抵抗を示す。
				111	(M) 母親が物を取るのに抵抗を示す。
					ジェスチャー
				112	(✓) Peer, 母親以外の人に(物を用いずに)拍手, バイバイ, イナイナイバー等の手を用いた動作をする。
				113	(P) Peerに(物を用いずに)拍手, バイバイ, イナイナイバー等の手を用いた動作をする。
				114	(M) 母親に(物を用いずに)拍手, バイバイ, イナイナイバー等の手を用いた動作をする。
					* 50~113については模倣か否か, ゲームか否か, 一方的ゲームか否かの別をつける。
					[脚・全身] 活動・物
				115	(け) 物を蹴る。
				116	(の) 物の上に乗る, 降りる。
				117	(と) 物の上をとびはねる。
				118	(は) 物(トンネル, 家など)の中に入る, 出る。
				119	(タ) 114~117以外の脚または全身で物とかかわる。
					身体運動
				120	(✓) 走り回る, 体操をする等, 身体を動かすことを目的とした遊び。
				121	(M) 母親にふりまわされる等。
					ジェスチャー
				122	(✓) ヨーイドンのかっこうなど全身を用いた表現動作。
					* 114~121については模倣か否か, ゲームか否か, 一方的ゲームか否かの別をつける。
					[姿勢・移動]
				123	うつぶせ・(✓) 物の上でのうつぶせ, あおむけ姿勢も含む。
					あおむけ
77	つかむ・人・母親 母親	(✓) 母親に対して意図的に触れる。(neutralな触れ方)		104	(P) Peerから物を受けとる。
78		(○) 母親に対して物を用いて意図的に触れる。(neutralな触れ方)		105	(M) 母親から物を受けとる。
79		(R) 母親に何らかの行動をさせようとして, 母親の手をひっぱる。		106	奪う (✓) Peer, 母親以外の人から物を奪う。
80		(だ) 母親に抱きつく。		107	(P) Peerから物を奪う。
81		(な) 母親をなでる。(positiveな触れ方)		108	(M) 母親から物を奪う。
82		(㊤) 母親を物を用いてなでる。(positiveな触れ方)		109	抵抗 (✓) Peer, 母親以外の人から物を取るのに抵抗を示す。
83		(ぶ) 母親をぶつ, ひっぱる。蹴る, かみつく等も含む。(negativeな触れ方)		110	(P) Peerが物を取るのに抵抗を示す。
84		(㊦) 母親を物を用いてぶつ, ひっぱる等。(negativeな触れ方)		111	(M) 母親が物を取るのに抵抗を示す。
85	その他	(M') Peerの母親に意図的に触れる。			ジェスチャー
86		(O) 観察者に意図的に触れる。		112	(✓) Peer, 母親以外の人に(物を用いずに)拍手, バイバイ, イナイナイバー等の手を用いた動作をする。
	つかむ・物			113	(P) Peerに(物を用いずに)拍手, バイバイ, イナイナイバー等の手を用いた動作をする。
87	もつ	(✓) 87~89以外の人を意識したものでない物を用いた手の活動。		114	(M) 母親に(物を用いずに)拍手, バイバイ, イナイナイバー等の手を用いた動作をする。
88	リーチング(リ)	(人を意識したものでない)手をのばして物をさわったり, つかもうとしたりする。			* 50~113については模倣か否か, ゲームか否か, 一方的ゲームか否かの別をつける。
89	操作	(そ) (人を意識したものでない)物に対する, その物の機能に即した操作。			[脚・全身] 活動・物
90	象徴	(し) (人を意識したものでない)物を用いた象徴的遊び。		115	(け) 物を蹴る。
91	示す	(✓) 93, 96以外のPeer, 母親以外の人に対する物の呈示。		116	(の) 物の上に乗る, 降りる。
92		(P) 94, 97以外のPeerに対する物の呈示。		117	(と) 物の上をとびはねる。
93		(M) 95, 98以外の母親に対する物の呈示。		118	(は) 物(トンネル, 家など)の中に入る, 出る。
94		(そ) Peer, 母親以外の人に対して物の操作を試みさせる。		119	(タ) 114~117以外の脚または全身で物とかかわる。
95		(P _そ) Peerに対して物の操作を試みさせる。			身体運動
96		(M _そ) 母親に対して物の操作を試みさせる。		120	(✓) 走り回る, 体操をする等, 身体を動かすことを目的とした遊び。
97		(し) Peer, 母親以外の人に対して象徴的遊びを試みさせる。		121	(M) 母親にふりまわされる等。
98		(P _L) Peerに対して象徴的遊びをして			ジェスチャー
				122	(✓) ヨーイドンのかっこうなど全身を用いた表現動作。
					* 114~121については模倣か否か, ゲームか否か, 一方的ゲームか否かの別をつける。
					[姿勢・移動]
				123	うつぶせ・(✓) 物の上でのうつぶせ, あおむけ姿勢も含む。
					あおむけ

表 2 つづき

124	(M)	母親によりうつぶせ・あおむけ姿勢が保たれているもの。	133	Peer から (✓)	物理的に Peer から遠ざかる。
125	(✓)	物の上ですわったり、しゃがんだりするものも含む。	134	(M)	母親に、だかれたり、おぶわれたりして物理的に Peer から遠ざかる。
126	(M)	母によりすわる姿勢が保たれているもの。	135	その他 (✓)	131, 133以外の移動。
127	(✓)	四肢により身体を支える。	136	(M)	132, 134以外の母親による移動。
128	(M)	母により四つばい姿勢が保たれているもの。	[距離]	—Peer	同士の距離—
129	(✓)	物の上に立つものも含む。	137	接触 (✓)	子どもの身体の一部が互いに物理的に接触している状態。
130	(M)	母により立つ姿勢が保たれているもの。	138	腕とどく (✓)	少し動けば、子どもの身体が互いにふれうる距離(1m 未満)の状態。
移動			139	腕とどく (✓)	子ども同士の距離が 138 より離れている状態。
131	Peer へ (✓)	物理的に Peer に近づく。	以上		
132	(M)	母親に、だかれたり、おぶわれたりして物理的に Peer に近づ			

れた項目に該当するものをチェックしていく。このチェックリストは、被験児の peer に対する行動、母親に対する行動、おもちゃや実験室内の備品に対する行動、自己活動等について、考え得る限りの被験児の行動を網羅し、これらの行動の様相を数量的に分析できるように考案されたものである。〈視線〉、〈姿勢・移動〉に関しては、各被験児について必ず一時点につき一カ所ずつチェックされ、〈距離〉に関しては一組のペアについて必ず一時点につき一カ所ずつチェックされることとする。〈口〉、〈発声〉、〈顔及び表情〉、〈手・腕〉、〈脚・全身〉に関しては、チェックリストの項目に当てはまる行動が観察された場合、それぞれ一時点につき一カ所に限ってチェックされることとする。

b. 逐一筆記記録法

2名の被験児の行動及び被験児との間で相互作用行動が見出された場合の母親の行動を、視線・発声(発話)も含めて、特に被験児同士の相互作用行動を漏らさぬように留意して、VTR 画像に基づき逐一記録する。記録用紙は、2名の被験児とその母親たちの行動を記録する4つの欄に区切られており、それぞれの欄に記録された行動の発生契機に因果関係が観察される場合には、II-D-3項で詳述する形式に従い、それらの行動を矢印で結ぶこととする。表3に、その一例を示す。

VTR 画像には、実験室内の観察者の合図に合わせて、セッション開始と同時にその経過時刻が秒単位で superimpose される。

C 分析資料

以下、本論文で分析するのは、表1で示すように、前節で述べた方法で得られた資料のうち、第1回目の観察

(生後18カ月時)の記録である。

チェックリストは、全被験児ペアの第1~3セッションを分析の対象とする。即ち、各場面条件とも8セッションずつが分析の対象となる。このうち、P条件、NP条件は第1セッションと第3セッションが4つずつ、O条件は8セッションすべてが第2セッションとして行われたものであるが、今回の分析においてはセッションの順序性は問わないこととし、場面条件の相違のみを考慮して、分析することとする。又、チェックリストの下位項目のうち、必ず一時点につき一カ所ずつチェックされる項目の観察時点の総数は、〈視線〉、〈姿勢・移動〉が各場面条件につき960時点ずつ(1セッション60時点×16被験児)であり、〈距離〉が480時点(1セッション60時点×8ペア)である。

逐一筆記記録は、全被験児ペアの第1セッション、及び E.F.—M.D., D.M.—N.M. 両ペアの第2セッションを分析の対象とする。即ち、P条件、NP条件が各4セッション、O条件が2セッション、分析の対象となる。O条件の2セッションは比較的相互作用が頻繁に観察されたと思われる資料である。

尚、これらの観察は、1985年7月中に実施された。

D 分析方法

チェックリスト法によるデータについては、今回は、B-2-a に示した各項目の「頻度分析」が中心であり、特記すべきことはない。そこで、ここでは逐一筆記記録法によるデータの分析方法について詳述する。

1. 相互作用行動

表3に例示したように、二人の子どもの行動は、文脈から同時的、継時的にひとまとまりとなる複合的なもの

表3 逐一筆記記録の例

	H.N.の母	H.N. (視線)	(視線)	S.A.	S.A.の母
0:00		<ul style="list-style-type: none"> • 立って「ドーイ」と言い、ドラエモンを目を指す • キョロキョロ見渡す • ドラエモンを指差しながら「ドーイ」と言い、Mを見る • 「カイイ」と言い、ドラエモンを抱き締める 	ドラ M ドラ	<ul style="list-style-type: none"> • H.N.を見る • 「〜」とむずがりながら壁の方を指差す 	H.N.の母と話し出す
0:10		<ul style="list-style-type: none"> • 母の方を見る • ドラエモンを離し、S.A.の方向へ歩いてS.A.を見て、S.A.に向かって「アー」と叫ぶ • 母の方を見る • ドラエモンの方向へ戻り、ドラエモンにさわる 	M S.A. M ドラ	<ul style="list-style-type: none"> • 指さしをやめて、H.N.を見る • 母の方を見る • H.N.を見る • H.N.を目で追う 	
0:20		<ul style="list-style-type: none"> • S.A.を見る • 母の方を見る • ドラエモンを押す 	S.A. M ドラ	<ul style="list-style-type: none"> • 前方を見る • H.N.を見る 	
0:30		<ul style="list-style-type: none"> • ドラエモンを押すのをやめ、ドラエモンを目を指差して、「ドーイ」と言いながら母の方を見る • ドラエモンから離れ、あたりを見回す • トランポリンに近づき登りはじめる 	M 周囲 ドラ	<ul style="list-style-type: none"> • 前方を見る • H.N.を見る • H.N.の母の方を見ながらクッションに近づき手を置く 	
0:40		<ul style="list-style-type: none"> • トランポリンに登り、立ち上がってからしゃがみ、四つばいになる • S.A.を見る 	周囲 S.A.	<ul style="list-style-type: none"> • クッションに手を置いたまま上を見る • 土を見ながら立ち上がりうでを広げて窓の方へ歩いてゆく 	
0:50		<ul style="list-style-type: none"> • トランポリンから半分降りた状態(はらばい) • トランポリンを離れてあひるに近づき、「ドッチモー」と言って、あひるを前に押し出す 	あひる	<ul style="list-style-type: none"> • 母に背中から抱きついて最初H.N.の母を見て次に母を見る • チラリとH.N.を見てからクッションの上にあがる 	「……」と言い、家の方を指差す
1:00			M H.N.	<ul style="list-style-type: none"> • 「ハッハッハー」と言って母のひぎにしゃがみ込んで、H.N.を見る 	

も含めて、相互作用を持つ行動を矢印で結んである。相互作用行動とは、原則として、相互に因果関係のある対行動、即ち、相手の行動変化を引き起こす initiative 行動と相手により引き起こされる responsive の行動をさす。ただし、今回の分析では相手の行動変化を引き起こすには至らなかったが、社会的な方向性があると考えられる行動も分析の対象に加えている。

2. 相互作用機能レベル

相互作用行動を次の機能レベルに分類する。なお、この機能レベルは、相互作用の質的、機能的性質を調べる目的で資料から帰納的に作成した分類基準である。

a. Initiative 行動

相互作用の開始行動を、相手に対する働きかけ意図の明確さ、強さから次の3つのレベルに分ける。

〈無意図的もしくは意図の明示されない行動〉

I₁ 単独行動：社会的方向性をもたない、相手に働きかける意図のない行動のうち、相手がそれに刺激されて行動をひきおこし、形式的には相手への initiative 行動となっているもの。

I₂ 傍観行動：相手を「みる」に代表される社会的方向性をもつ行動ではあるが、相手に働きかける意図があるかどうかは明確でないもの。また、それが相手の行動により引き起こされた行動とも思われないもの。

〈意図的行動〉

I₃ 要求行動：相手への働きかけを意図した、社会的方向性をもった行動。

b. Responsive 行動

相互作用の応答行動を、相手の働きかけに対する受容意図の明確さ、内容から次の5つのレベルに分ける。

〈無意図的もしくは意図の明示されない行動〉

R₁ 無視：相手の initiative 行動に気づかずにそれまでの社会的方向性をもたない行動をつづけるもの。

R₂ 傍観行動：相手の initiative 行動に気づいてはいるが、それまでの社会的方向性をもった行動にどんな変化も起こさないもの。

〈相互作用終結または拒否の意図をもつ行動〉

R₃ 撤回行動：相手の initiative 行動により、それまでの社会的方向性をもった行動を撤回し、もたない行動

表 4 相互作用の各機能に含まれる行動

Initiative 行動	Responsive 行動
<p>I₁……単独行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・無意図的な対 Peer 行動（物理的接近、Peer の持つ Toy への接触、対 Peer 行動の撤回、etc.） ・対大人行動（M、O、M' への接近、注視、etc.） ・Toy、Fixture に対する行動（Toy、Fixture への接近・接触、注視、物音を立てる、etc.） ・対 Peer 以外の発声・発話・むずかり・泣き・笑い etc. ・物を使用しない身体活動 ・これらの複合された活動 etc. 	<p>R₁……無視</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な自己活動
<p>I₂……傍観行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Peer に対する注視 ・Peer の持つ Toy、Fixture などに対する注視 ・これらに自己活動（発声、Toy の操作、移動 etc.）が複合された活動 etc. 	<p>R₂……傍観</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Peer に対する注視 etc.
<p>I₃……要求行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Peer に対する注視 ・Peer の持つ Toy、Fixture などに対する注視 ・Peer への物理的接近・接触、攻撃 etc. ・Peer に対する発声・発話・笑い声 etc. ・Peer に対して物を示す、差し出す etc. ・Peer の持つ Toy、Fixture などに対する物理的接近・接触、奪う etc. ・Peer に対するジェスチャー ・これらの複合された活動 etc. ・これらに自己活動（Toy の操作、移動 etc.）が複合された活動 etc. 	<p>R₃……撤回行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Peer に対する注視の撤回 ・Peer に対する物理的接近・接触の撤回 ・Peer の持つ Toy、Fixture に対する注視の撤回 ・Peer の持つ Toy、Fixture に対する接近・接触の撤回 ・これらに自己活動（泣き・むずかり・Mに対する発話・発声 etc.）が複合された活動 etc.
	<p>R₄……受容行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Peer に対する注視 ・Peer の持つ Toy、Fixture、Peer の指さした対象に対する注視 ・Peer の攻撃に対する無抵抗 ・これらに自己活動（泣き・むずかり・Mに対する発話・発声、Toy の操作、移動 etc.）が複合された活動 etc.
	<p>R₅……応答行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・I₃ に示したものと同様な活動 ・Peer の攻撃に対する抵抗 ・自分の持つ Toy、Fixture などを Peer が奪おうとする行動に対する抵抗 ・Peer が差し出した物を受け取る etc.

に変えるもの。

〈受容意図は明示されるが、継続意図が明示されない行動〉

R₄ 受容行動：相手の行動により引き起こされた社会的方向性をもつ行動ではあるが、相互作用継続の意図があるかどうかは明確でないもの。

〈相互作用継続の意図をもつ行動〉

R₅ 応答行動：相手により引き起こされた行動であると同時に相手への働きかけの意図をもった(=I₃)行動。

なお、連続される相互作用の場合、同一相互作用行動が、initiative 機能と responsive 機能の2つの機能レベルに分類される。各機能レベルの下位分類は、表4に挙げた。

3. 相互作用対

表3に示すように、initiative 行動と responsive 行動は矢印で結ばれる。initiative 行動としての意図が明確な場合(即ち前項で定義した I₃, R₅)は実線、不明確な場合(I₂)は破線、意図がない場合(I₁)は点線で示すこととする。また、responsive 行動が「無視」(R₁)、「傍観行動」(R₂)の場合は、initiative 行動が相手に変化を生じさせなかったという意味で、矢印を2分の1の長さとする。尚、共時的行動(例えば、initiative 行動が2人の間で同時に生じる場合)は、等号で結ぶ。これらの矢印、及び等号で結ばれた2つの行動を相互作用対と呼ぶこととする。この中で、特に実線で結ばれた相互作用対を意図的相互作用対と呼ぶ。

相互作用対は、矢印1本の長さを1ターンと数え、2分の1の長さの矢印は0.5ターンの相互作用対と考えることとする。尚、等号は矢印1本の長さと同価と考え、1ターンとする。

4. 相互作用ユニット

responsive 行動が相手の次の相互作用行動に対する initiative 行動としての機能を担っていない場合、その行動は終結行動と呼ぶこととし、最初の initiative 行動から終結行動までを1つの相互作用ユニットとする。又、以後、相互作用ユニットの最初の initiative 行動を開始行動と呼ぶこととする。従って、1つの相互作用ユニットは、連続する複数の相互作用対から成り立ち得る。ただし、最初の相互作用対を除いて、相互作用ユニットを構成する相互作用対は、すべて意図的相互作用対とする。これらの相互作用ユニットのパターンを表5に示す。尚、各パターンにはそれぞれ2種類の終結行動がある。

又、意図的相互作用対のターン数を基準として、相互作用ユニットを以下のように分類する。

a. Interaction ユニット

意図的相互作用対数2ターン以上の相互作用ユニットを interaction ユニットと呼ぶ。即ち、被験児が双方ともに明確に相手に対して相互作用行動を行う意図を持ち、少なくとも各1度ずつは相手に相互作用行動(R₃~R₅)を起こすことに成功した場合。表6に示す通り、開始行動が I₃ の場合はパターン4、I₁, I₂ の場合はパターン6以下の相互作用ユニットである。以下、Interaction ユニットの IA ユニット、又は IA と略記することとする。

b. Preinteraction ユニット

IA ユニットに至らない相互作用ユニットを Preinteraction ユニットと呼び、PI ユニット、又は PI と略記する。PI ユニットは意図的相互作用対の数により、以下の4種に分類される。

PIa: 意図的相互作用対が無い相互作用ユニット。即ち、双方ともに相互作用の明確な意図を持たずに生起する相互作用ユニット。表6に示すとおり、開始行動が I₁ の場合はパターン2、I₂ の場合はパターン1, 2。

PIb: 意図的相互作用対が0.5ターンの相互作用ユニット。即ち、一方は相互作用の明確な意図を持つが、相手の行動変化を惹起せずに終結した相互作用ユニット。表6に示すとおり、開始行動が I₁, I₂ の場合はパターン3、I₃ の場合はパターン1。

PIc: 意図的相互作用対が1ターンの相互作用ユニット。即ち、一方が相互作用の明確な意図を持ち、相手の行動変化を惹起するが、相手その後相互作用を継続しないで終結する相互作用ユニット。表6に示すとおり、開始行動が I₁, I₂ の場合はパターン4、I₃ の場合はパターン2。

PId: 意図的相互作用対が1.5ターンの相互作用ユニット。即ち、双方とも相互作用の明確な意図を持つが、一方が相手の行動変化を惹起するに至らない相互作用ユニット。表6に示すとおり、開始行動が I₁, I₂ の場合はパターン5、I₃ の場合はパターン3。

5. 分析の信頼性

チェックリストの信頼性は、次のような便宜的な方法を用いて算出した。任意の1セッションについて観察者2名が各々にVTR録画からチェックリストを作り、その両者のチェックの一致度(一致したチェック数と総チェック数の比)を計算した。その結果は、0.987の一致度であった。また、相互作用ユニットに関しては、3分の逐一筆記記録について両者が独自にあげたユニットを合議し、仮に正しいユニットを決定した。そして、両者の一致したユニット数を正答とみなされたユニット数

表 5 相互作用ユニットのパタン

Initiative 行動 パタン	開始意図が無い (I ₁)		開始意図が不明確 (I ₂)		開始意図が明確 (I ₃)	
	C ₁	C ₂	C ₁	C ₂	C ₁	C ₂
パタン 1	/		I ₂ → ● R ₁ , R ₂		I ₃ → ● R ₁ , R ₂	
パタン 2	I ₁ → ● R ₃ , R ₄		I ₂ → ● R ₃ , R ₄		I ₃ → ● R ₃ , R ₄	
パタン 3	I ₁ → ● R ₅ (=I ₃) R ₁ , R ₂ ●		I ₂ → ● R ₅ (=I ₃) R ₁ , R ₂ ●		I ₃ → ● R ₅ (=I ₃) R ₁ , R ₂ ●	
パタン 4	I ₁ → ● R ₅ (=I ₃) R ₃ , R ₄ ●		I ₂ → ● R ₅ (=I ₃) R ₃ , R ₄ ●		I ₃ → ● R ₅ (=I ₃) R ₃ , R ₄ ●	
パタン 5	I ₁ → ● R ₅ (=I ₃) R ₅ (=I ₃) ● → R ₁ , R ₂ ●		I ₂ → ● R ₅ (=I ₃) R ₅ (=I ₃) ● → R ₁ , R ₂ ●		I ₃ → ● R ₅ (=I ₃) R ₅ (=I ₃) ● → R ₁ , R ₂ ●	
パタン 6	I ₁ → ● R ₅ (=I ₃) R ₅ (=I ₃) ● → R ₃ , R ₄ ●		I ₂ → ● R ₅ (=I ₃) R ₅ (=I ₃) ● → R ₃ , R ₄ ●		I ₃ → ● R ₅ (=I ₃) R ₅ (=I ₃) ● → R ₃ , R ₄ ●	
パタン 7	I ₁ → ● R ₅ (=I ₃) R ₅ (=I ₃) ● → R ₅ (=I ₃) ● R ₁ , R ₂ ●		I ₂ → ● R ₅ (=I ₃) R ₅ (=I ₃) ● → R ₅ (=I ₃) ● R ₁ , R ₂ ●		I ₃ → ● R ₅ (=I ₃) R ₅ (=I ₃) ● → R ₅ (=I ₃) ● R ₁ , R ₂ ●	
パタン 8	I ₁ → ● R ₅ (=I ₃) R ₅ (=I ₃) ● → R ₅ (=I ₃) ● R ₃ , R ₄ ●		I ₂ → ● R ₅ (=I ₃) R ₅ (=I ₃) ● → R ₅ (=I ₃) ● R ₃ , R ₄ ●		I ₃ → ● R ₅ (=I ₃) R ₅ (=I ₃) ● → R ₅ (=I ₃) ● R ₃ , R ₄ ●	

パタン9以下は省略する。

表6 パタン別意図的相互作用対数

PIユニット	I ₁	I ₂	I ₃
パタン1	—	0ター (PIa)	0.5ター (PIb)
パタン2	0ター (PIa)	0ター (PIa)	1ター (PIc)
パタン3	0.5ター (PIb)	0.5ター (PIb)	1.5ター (PId)
パタン4	1ター (PIc)	1ター (PIc)	—
パタン5	1.5ター (PId)	1.5ター (PId)	—

IAユニット	I ₁	I ₂	I ₃
パタン4	—	—	2ター
パタン5	—	—	2.5ター
パタン6	2ター	2ター	3ター
パタン7	2.5ター	2.5ター	3.5ター
パタン8	3ター	3ター	4ター

以下省略

と一方のみがユニットとみなした数の合計で割りそれを一致度とした。結果は0.905の一致度であった。

III 結果

A チェックリスト法を用いた子どもの個別行動の分析

チェックリストの各行動カテゴリ・各行動項目の生起頻度を場面条件別に分析し、場面条件による個別行動の傾向を調べる。

1. 視線

視線は、各観察時点(各条件とも総計960時点)で視線に関する項目のいずれかに必ずチェックされる。表7に、全観察時点の各視線項目の割合を、場面条件別に示した。

〈注視・人〉(項目1~8の合計)はO条件で61%と大きな割合を占めるが、P条件ではおよそその半分の33%を占めるにすぎない。逆に、〈注視・物〉(項目9~21の合計)はP条件で57%と大半を占めるが、O条件では33%にすぎない。P条件では物志向、O条件では人志向の傾向があるといえよう。NP条件については〈注視・人〉52%、〈注視・物〉42%であり、O条件ほどではないが、人志向の傾向があるといえよう。

〈注視・人〉がO条件、NP条件で多く、P条件では少ないという傾向は、〈注視・人〉の下位項目〈注視・人(P)〉(項目1)でも示されている。しかし、〈注視・

人(大人)〉(項目2~4)、及びその大半を占める〈注視・人(M)〉(項目2)では、異なった傾向が示されている。O条件では24%と多いのだが、NP条件では15%とP条件とはほぼ同じ割合になっているのである。すなわち、NP条件では人志向のうちでもpeer志向が強く、大人(主に母親)への志向は弱い(〈注視・人〉の7割は〈注視・人(P)〉であり、これが視線項目のうち最も多くの割合を占める)。一方、O条件では、peer志向とともに、大人(主に母親)への志向もかなり強いと考えられるのである。

〈注視・物〉に関しては、〈注視・物〉がP条件で多いという傾向が〈注視・物・Toy〉(項目9~14)のいずれの下位項目でも示されている。さらにP条件では〈注視・物・持っているToy(S)〉(項目10)が34%で視線下位項目で最も多くの割合を占めている。前述したようにP条件では物志向が強いのだが、このことから、P条件での子どもの物への関心は、単に物を見るといった消極的なものではなく、把持や操作といった積極的なtoyへの働きかけにあると考えられる。

2. 発声

表8は、全観察時点中の発声項目の割合を場面条件別に示したものである。

発声全体の割合はP条件で18%、NP条件で15%、O条件で22%となっており、O条件で最も発声行動が活発になされていることがわかる。この傾向は、不快を表わす発声を除いた〈発声・発話・人〉(項目27~41)でもみられ、O条件12%、NP条件8%、P条件7%とO条件が最も多くなっている。また〈発声・発話・人(P)〉(項目27, 30, 38)、〈発声・発話・人(M)〉(項目31, 32, 39)、〈発声・発話・人(/)〉(項目27, 28, 37)といった下位項目でもこの傾向は一貫してみられる。

発声では、視線で開眼が僅かだったのと異なり、誰に向けたかが明確でない発声〈発声・発話・人(/)〉がO条件で5%、NP条件で4%と発声項目の中で最も多くの割合を占める。またP条件でも2%とかなり多くの割合を占めており、視線とは違って、志向性は明確には示されにくい。また、どの条件でもpeerへ向けた発声〈発声・発話・人(P)〉よりは、母親へ向けた発声〈発声・発話・人(M)〉の方が多く、場面条件を超えて、発声行動では母親志向がみられる。ただし、条件間を比較するとpeerへ向けた発声〈発声・発話・人(P)〉はP条件で少なく、O条件、NP条件で多い。また、母親へ向けた発話〈発声・発話・人(M)〉はP条件、O条件で多く、NP条件では少ない。つまり、NP条件ではpeer志向の傾向が、O条件ではpeer志向と母親志向の併存

表 7 視線 (出現頻度が0の項目は表から除かれている。以下の表でも同様)

条 件			P 条件	NP 条件	O 条件	P vs O		
項 目								
注視・人			33.0	***	51.5	***	61.0	***
1	Peer	(P)	18.9	***	36.4	n.s.	35.9	***
2~4	大人		14.1	n.s.	14.6	***	23.9	***
2		(M)	10.5	n.s.	11.4	***	19.5	***
3		(M')	1.9	n.s.	1.5	n.s.	1.6	n.s.
4		(O)	1.7	n.s.	1.8	n.s.	2.8	*
5, 8	自分		0.1		0.5	n.s.	1.3	**
5		(S)	0.1		0.5		0.9	
8		(S)	—		—		0.3	
注視・物			57.4	***	42.4	***	32.9	***
<Toy>			49.8	***	32.0			
10~14	持っている Toy		42.3	***	23.3			
	Peer		6.3	*	4.1			
11		(P)	4.3	*	2.6			
12		(PS)	2.0	n.s.	1.5			
13, 14	大人		2.5	***	—			
13		(M)	2.1	***	—			
14		(M')	0.4		—			
10	自分	(S)	33.5	***	19.3			
9	持っていない Toy (/)		7.5	n.s.	8.7			
<Toy以外の物>			7.6	***	10.6	***	32.9	***
16~21	持っている物		2.1	***	4.6	***	11.6	***
17~18	Peer		—		0.5		0.9	
17		(P)	—		0.3		0.7	
18		(PS)	—		0.2		0.2	
19~21	大人		0.2		0.1		0.4	
19		(M)	0.2		0.1		0.4	
16	自分	(S)	1.8	***	4.0	***	10.3	***
15	持っていない物 (/)		5.5	n.s.	6.0	***	21.3	***
22	開眼		9.6	***	5.9	n.s.	6.0	***

* P<.05, ** P<.01, *** P<.005 (x² 検定による)

なお出現頻度がどの条件でも10以下のものについては検定を行っていない。

傾向がみられる。これらは視線でみられた志向性と一致している。なお、P条件については、視線では物志向が示されたが、発声では、発声の一般的傾向を反映し、母親志向がみられる。

発声の中でも不快を表わす〈泣き・むずかり〉(項目25, 26)については、P条件では11%で発声の6割

を占めている。O条件では発声全体の5割に満たないが、10%を占め、絶対量としてはP条件同様、かなり多い。これに対しNP条件では7%と他条件に比べて少なく、NP条件では不快が生じにくいと考えられる。また〈笑い〉(項目30, 32, 34, 36, 28)は全体的に少ないが、他と比べればO条件で最も多くみられ、O条件では快が

表8 発声

項 目		条 件		P 条件		NP 条件		O 条件		P vs O	
25, 26	泣き・むずかり			11.0	***	7.0	*	9.8		n.s.	
27~41	発声・発話・人			6.7	n.s.	7.6	***	11.7		***	
	Peer			0.6	n.s.	1.2	n.s.	1.6		*	
29	発声	(P)		0.6		0.7		0.6			
30		(Ⓟ)		—		0.4		0.6			
38	発話	(P)		—		—		0.3			
	[模倣			[—]		[0.4]		[0.1]			
	[(✓)		[—]		[—]		[0.1]			
	[(G)		[—]		[—]		[—]			
	大人			4.2	*	2.4	**	4.7		n.s.	
	母親			4.0	*	2.3	**	4.5		n.s.	
31	発声	(M)		1.4	n.s.	1.4	*	2.7		*	
32		(Ⓜ)		—		0.1		0.1			
39	発話	(M)		2.6	***	0.8	n.s.	1.7		n.s.	
	母親以外			0.2		0.1		0.2			
34	発声	(Ⓜ)		—		—		0.1			
35		(O)		—		0.1		—			
36		(Ⓞ)		0.2		—		0.1			
	その他			1.9	***	4.1	n.s.	5.4		***	
27	発声	(✓)		1.4	***	3.7	n.s.	4.7		***	
28		(⊙)		—		0.2		0.5			
37	発話	(✓)		0.5		0.2		0.2			
	[模倣	(✓)]		[—]		[—]		[0.2]			
25~41	発声	(合計)		17.7	n.s.	14.6	***	21.5		*	

表9 顔および表情

項 目		条 件		P 条件		NP 条件		O 条件		P vs O	
42	不快			12.4	***	8.2	***	12.9		n.s.	
	[原因			[3.8]		[3.3]		[4.2]			
	[(P)		[6.4]		[3.3]		[2.4]			
	[(M)		[—]		[0.4]		[0.7]			
	[(✓)		[—]		[—]		[—]			
	[対象			[0.4]		[0.1]		[0.1]			
	[(P)		[10.0]		[7.8]		[12.0]			
	[(M)		[—]		[—]		[0.1]			
	[(✓)		[—]		[—]		[—]			
43~45	拒否			—		—		0.4			
44		(P)		—		—		0.3			
45		(M)		—		—		0.1			
49	快			0.2	*	1.2	n.s.	2.2		***	

生じやすいと考えられる。

3. 顔および表情

表9に示したように〈不快〉(項目42)はP条件、O条件で多く、NP条件では少ない。これは、不快の発声〈泣き・むずかり〉の傾向と一致している。NP条件では、他の条件と比べて不快が生じにくいと考えられよう。また、〈快〉はその割合はどの条件でも少ないが、O条件では、他の条件に比べれば多い。これは、発声の〈笑い〉の傾向とも一致している。O条件では〈不快〉も生じやすいが、逆に〈快〉も生じる場合があると考えられる。また、P条件は〈不快〉は生じやすいが〈快〉は生じにくいと云えよう。

4. 手・腕の活動

手・腕の活動は、「つかむ・人」、「つかむ・物」及び「ジェスチャー」の3項目を含む。

表10-1に、人に対する意図的接触「つかむ・人」の、

表10-2に、物との接触「つかむ・物」の、表10-3に「ジェスチャー」の各項目の割合を、場面条件に示した。

a. 「つかむ・人」「つかむ・物」

P条件、NP条件では「つかむ・人」より「つかむ・物」の方が断然多い。O条件では「つかむ・人」と「つかむ・物」がほぼ同程度みられる。

〈つかむ・人〉(項目71~86)はO条件では27%とかなり多いが、P条件では、その約1/3の10%にすぎない、逆に〈つかむ・物〉(項目87~114)はP条件では63%を占めるが、O条件ではその半分の32%である。視線同様、接触でもP条件では物志向、O条件では人志向の傾向がみられる。NP条件については〈つかむ・人〉15%、〈つかむ・物〉45%で、視線とは異なり、P条件ほどではないが、物志向の傾向がみられる(表10-1, 10-2参照)。

〈つかむ・人〉がO条件で多く、P条件、NP条件で少ないという傾向は、〈つかむ・人〉の下位項目、〈つか

表 10-1 手・腕の活動「つかむ・人」

条 件		P 条件	NP 条件	O 条件	P vs O
項 目					
71~76	Peer	0.1	0.7 ***	2.6	***
	[模倣]	[—]	[—]	[0.6]	
	(O)	[—]	[—]	[0.2]	
	(G)	[—]	[—]	[0.4]	
71	neutral (✓)	—	0.3 ***	2.2	***
73	positive (な)	—	—	—	
75	negative (ぶ)	0.1	0.4	0.4	
77~86	大人	10.3	n.s. 13.9 ***	24.7	***
	[模倣]	[—]	[—]	[0.7]	
	(✓)	[—]	[—]	[0.3]	
	(O)	[—]	[—]	[0.4]	
77~84	母親	10.3	n.s. 13.9 ***	24.6	***
	neutral	5.6 **	8.9 ***	15.9	***
77	(✓)	5.4 **	8.9 ***	15.9	***
78	(○)	0.2	—	—	
	negative	0.1	0.7	0.1	
83	(ぶ)	—	0.7	0.1	
84	(㊟)	0.1	—	—	
	その他	4.6 n.s.	4.3 ***	8.5	***
79	(R)	—	—	0.5	
80	(だ)	4.6 n.s.	4.3 ***	8.0	***
85	Peer の母親 (M')	—	—	0.1	
71~86	つかむ・人 (合計)	10.4 **	14.6 ***	27.3	***

表 10-2 手・腕の活動「つかむ・物」

項 目		条 件		P 条件	NP 条件	O 条件	P vs O		
87~90	非対人的物の使用			57.4	***	44.9	***	31.2	***
87	つかむ・物 (✓)			38.0	n.s.	39.2	***	28.5	***
	[模倣 (✓)]			[—]		[1.4]		[1.2]	
	(✓)			[—]		[1.4]		[1.0]	
	(O)			[—]		[—]		[0.1]	
88	リーチング (リ)			2.3	***	0.8		0.2	
89	操作 (そ)			11.7	***	4.8	***	2.4	***
	[模倣(✓)]			[—]		[—]		[0.1]	
90	象徴遊び (し)			5.4		0.1		—	
91~111	対人的物の使用			4.7	***	0.4		0.5	***
	Peer			1.1	**	0.1		0.1	**
92,95,98	示す			0.2		—		—	
92	(P)			0.1		—		—	
95	(P ₂)			0.1		—		—	
101	差し出す (P)			0.2		—		0.1	
	[模倣(✓)]			[—]		[—]		[0.1]	
104	受けとる (P)			0.2		—		—	
107	奪う (P)			0.3		—		—	
110	抵抗 (P)			0.2		0.1		—	
	大人			3.6	***	0.3		0.4	***
	母親			3.1	***	0.2		0.4	***
93,96,99	示す			1.6		—		—	
93	(M)			1.2	**	0.1		0.2	*
99	(M ₁)			0.4		—		—	
102	差し出す (M)			1.5		—		—	
105	受けとる (M)			—		—		0.1	
108	奪う (M)			—		0.1		0.1	
	母親以外			0.5		0.1		—	
91	示す (✓)			0.2		—		—	
100	差し出す (✓)			0.3		—		—	
109	抵抗 (✓)			—		0.1		—	
87~111	「つかむ・物」(合計)			62.1	***	45.3	***	31.7	***

表 10-3 手・腕の活動「ジェスチャー」

		P 条件	NP 条件	O 条件	P vs O
50~57	指さし・人	—	0.4	0.8	
50	Peer (P)	—	0.3	0.8	
	模倣 (O)	[—]	[—]	[0.2]	
	(G)	[—]	[—]	[0.1]	
51	大人 (M)	—	0.1	—	
58~70	指さし・物	0.1	0.5 n.s.	1.4	***
59~63 65~70	持っている Toy・物	—	—	0.1	
67	大人 (M')	—	—	0.1	
58, 64	持っていない Toy・物	0.1	0.5 n.s.	1.3	***
112~114	ジェスチャー	0.1	0.1	0.6	
113	Peer (P)	—	0.1	—	
112	大人 (✓)	0.1	—	0.6	

む・人・Peer) (項目71~76) 及び〈つかむ・人・大人〉 (項目77~86) でも示されている。このうち〈つかむ・人・Peer〉はどの条件でも少ないのであるが、特にP条件では0.1%とごく僅かであり、それも全てnegativeな接触〈つかむ・人・Peer(ぶ)〉(項目76)が占めている。一方O条件では2.6%みられ、このうちnegativeな接触は2割に満たない。さらにO条件ではゲームとしてのpeer同士の接触〈模倣(O), (G)〉も出現している。このようにP条件に比べてのO条件における人(=peer)志向傾向は僅ではあるが示されている。ただし、どの条件でも〈つかむ・人・大人〉の下位項目〈つかむ・人・母親〉(項目77~83)が〈つかむ・人〉の項目の中で最も大きな割合(90%~99%)を占めており、人に対する意図的接触の対象は主に母親であるといえる(表10-1参照)。

〈つかむ・物〉に関しては、P条件で多く、O条件で少ないという傾向は〈つかむ・物〉の下位項目である〈非対人的物の使用〉(項目87~89)及び〈対人的物の使用〉(項目99~111)でも示されている。特に〈対人的物の使用〉については、NP条件、O条件では、原則として持ち運び可能な物がないという設定条件上、頻度はごく僅かである。そこで〈対人的物の使用〉についてはP条件でどのような行動項目が出現しているかをみる(表10-2)と、大人それも母親に対しての行動がpeerに対する行動の約3倍を占める。ただ、母親(及び大人)への行動レパトリーは少なく、〈示す〉〈差し出す〉に

限られている。一方peerへの行動はバラエティーに富んでおり〈示す〉〈差し出す〉〈受けとる〉の他〈奪う〉〈抵抗〉といった項目もみられる。

〈非対人的物の使用〉についてはこれも設定条件上当然のことながら〈つかむ・物・(そ)〉(項目89)、〈つかむ・物・(し)〉(項目90)で他条件に比べてP条件でその割合が多い。ただし〈つかむ・物・(／)〉は、NP条件、O条件でもかなり多く、特にNP条件ではP条件と同程度みられる。また、NP条件、O条件ではpeerに対する模倣でこの〈つかむ・物・(／)〉が出現しているが、P条件では模倣はみられず、P条件におけるpeer志向の弱さがこれでも示されている。

b. 「ジェスチャー」

物の使用をとまなわない、手・腕による表現動作「ジェスチャー」の割合は表10-3に示した。割合はごく少ないが、下位項目〈指さし〉、〈ジェスチャー〉ともO条件で(特に母親に対して)生じやすく、P条件では生じにくい傾向がある。

5. 脚・全身活動

表11は〈脚・全身活動〉の各項目の割合を場面条件別に示したものである。

〈脚・全身活動〉(項目115~122)は、NP条件で31%、O条件で15%、P条件で3%とNP条件で多く、P条件では非常に少ない。NP条件の〈脚・全身活動〉のほとんどは〈活動・物〉(項目115~119)であり、〈身体運動〉(項目120~121)はごく僅かである。〈身体運動〉は

表11 脚・全身の活動

条 件		P 条件	NP 条件	O 条件	P vs O
項 目					
115~119	活動・物	0.3 ***	29.5 ***	4.2 ***	***
	[模倣 (/) (O) (G)]	[—] [—] [—] [—]	[2.4] [1.4] [0.2] [0.8]	[0.4] [0.4] [—] [—]	
115	(け)	—	—	0.1	
116	(の)	0.1 ***	21.3 ***	3.2 ***	***
117	(と)	—	—	—	
118	(は)	—	5.8	—	
119	(タ)	0.2 ***	2.4 **	0.8	
120~121	身体運動	3.1 ***	1.2 ***	10.4 ***	***
120	自力 (/)	3.1 ***	1.0 ***	10.3 ***	***
	[模倣 (/) (O) (G)]	[0.5] [0.5] [—] [—]	[0.4] [—] [—] [0.4]	[4.5] [1.2] [1.7] [1.7]	
121	母親による (M)	—	0.1	0.1	
122	ジェスチャー (/)	—	0.1	0.1	
	[模倣(G)]	[—]	[—]	[0.1]	
115~122	脚・全身(合計)	3.4 ***	30.7 ***	14.7 ***	***

O条件で最も多くみられる。また、O条件及びNP条件では、脚・全身を用いたゲームや peer の脚・全身活動の模倣などもみられる。

6. 姿勢・移動

姿勢・移動は、視線と同様に各観察時点で姿勢・移動に関する項目のいずれかに必ずチェックされる。表12に、その割合を示した。〈移動〉(項目131~136)はNP条件、O条件に比してP条件では少ない。またP条件では、自力で〈坐る(/)〉(項目125)が最も多く、NP条件、O条件では〈立つ(/)〉(項目129)が最も多くみられる。またO条件ではNP条件、P条件に比べて〈姿勢・母親による〉(項目124, 126, 128, 130)が多い。これは、O条件における母親志向を示すものと考えられる。

7. 距離

距離も各観察時点で、距離のいずれかの項目に必ずチェックされる。表13にその割合を示した。どの条件でも〈腕とどく以上〉(項目138)が最も大きな割合を占めている。また3条件の中でもP条件は86%とこの〈腕とどく以上〉が占める割合は最も多く、peer間の距離はP

条件で一番離れているといえよう。

B 逐一筆記記録法を用いた相互作用の分析

1. 相互作用ユニットの分析

記録された相互作用ユニットの数、長さを場面条件別に分析し、場面条件による相互作用の傾向を調べる。厳密な意味での相互作用とは、IA ユニットの指し、PI ユニットの指しは前相互作用と呼ぶべきであるが、今回の観察において記録された IA ユニットの比較的小数であるのに対し PI ユニットの数は多く記録されており、PI ユニットの分析の対象に含めることは、意味があると考えられる。そこで、ここでは PI ユニットの双方について個別に分析した結果も含めて報告することにする。

a. 相互作用ユニット

相互作用ユニットの出現数は、図2に示すとおり、P条件において1セッション平均51.25回(31~66回、総計205回)、NP条件においては1セッション平均92.25回(81~107回、総計369回)、O条件においては1セッション平均83.5回(71回、96回、総計167回)であった。

表 12 姿勢・移動

条 件		P 条件		NP 条件		O 条件		P vs O	
		項 目							
123~130	停止一姿勢	90.5	***	84.5	n.s.	83.1	***		
	自力	82.1	***	76.9	***	66.0	***		
123	うつぶせあおむけ(✓)	6.0	*	3.5	***	7.1	n.s.		
125	坐る (✓)	49.8	***	19.0	***	7.4	***		
127	四つばい (✓)	3.3	n.s.	4.9	*	2.7	n.s.		
129	立つ (✓)	22.9	***	49.5	n.s.	48.9	***		
	母親による	8.4	n.s.	7.6	***	17.1	***		
124	うつぶせあおむけ(M)	3.2	*	1.6	***	4.3	n.s.		
126	坐る (M)	4.0	n.s.	2.8	***	9.3	***		
128	四つばい (M)	0.5		0.3		0.6			
130	立つ (M)	0.7	***	2.9		2.9	***		
131~136	移動	9.5	***	15.5	n.s.	16.9	***		
	自力	9.5	***	15.5	n.s.	16.9	***		
131	Peer へ (✓)	4.0	n.s.	4.8	*	6.3	*		
133	Peer から (✓)	4.0	*	6.0	n.s.	6.3	*		
135	その他 (✓)	1.6	***	4.7	n.s.	3.8	***		
132, 134, 136	母親による	—		—		—			

表 13 距離

条 件		P 条件		NP 条件		O 条件		P vs O	
		項 目							
137	接 触	1.7	*	3.8	n.s.	2.5	n.s.		
138	腕とどく	12.3	**	16.9	***	28.1	***		
139	腕とどく以上	86.0	**	79.4	***	69.4	***		

P条件とNP条件を比較すると、NP条件におけるすべてのペアの相互作用ユニット出現数がP条件におけるすべてのペアを上回っていることがわかり、NP条件の方が peer 同士の関わりが起り易いと言える。尚、O条件の分析に使用した2ペアは他のペアよりも頻繁に相互作用が見られたと思われるので、他の場面条件と比較して分析するためには資料が不足している。そこで、参考のために結果を併記しておくにとどめる。

b. IA (Interaction) ユニット

IA ユニット及び、PIユニットの個別の分析においては、相互作用の長さを問題とする。

IA ユニットは、表14に示すとおり、P条件においては1セッション平均0.75回(総計3回、P条件において

記録された全相互作用ユニット数の1.5%)、NP条件においては1セッション平均4.75回(総計19回、5.1%)、O条件においては1セッション平均16.5回(総計33回、19.8%)観察された。これらのIAのうちで最長のものは、P条件においてはパターン7(意図的相互作用対3.5ターン)、NP条件においてはパターン31(15.5ターン)、O条件においてはパターン26(12ターン)であった。全相互作用ユニットに対するIAユニットの出現比率はP条件、NP条件ともに低いが、特にP条件においてはIAユニットの出現は極めてまれであり、長いIAは観察されていない。NP条件と比較してP条件では peer 同士の関わり合いが起りにくいことは III-B-1-a でも述べたが、関わり合いが起った場合でも、ほとんどが

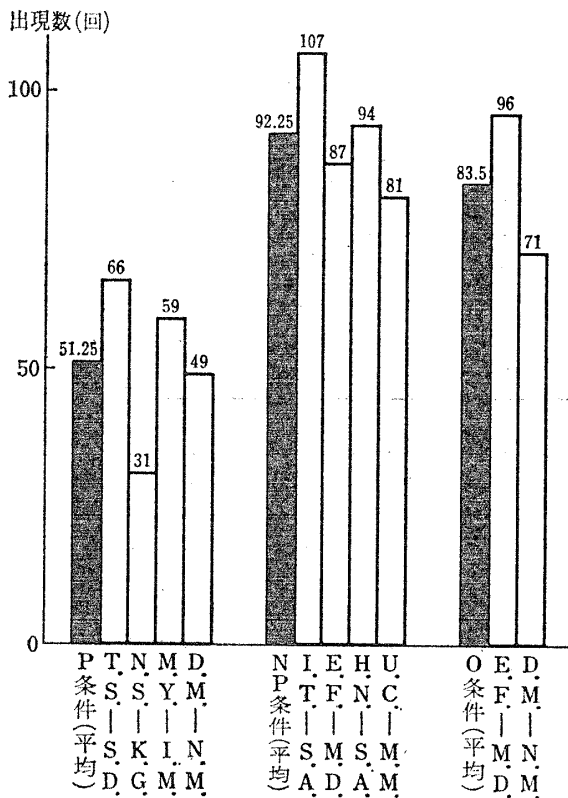


図2 場面条件別相互作用ユニット数

表14 場面条件別IAユニット数 (1セッション平均)

意図的相互作用対数	P条件	NP条件	O条件 (2ペア)
3ターン以下	0.50	2.50	8.5
3.5ターン以上	0.25	2.25	8.0
合計	0.75	4.75	16.5

相互作用に至らない短いものであることがわかる。NP条件においても、相互作用に至らない場合がほとんどであるが、相互作用に至った場合には、かなり長い間継続する事例もいくつか見られた(意図的相互作用対数3.5ターン以上が9回)。O条件では、2ペアのみの分析であるが、他の2つの場面条件より少ないセッション数で、IAユニットの総数が他の2つの場面条件を大きく上回っているのが特徴である。又、長い間相互作用が継続する事例も観察された(意図的相互作用対数3.5ターン以上が16回)。

c. PI (Preinteraction) ユニット

PI ユニットは、表15に示すとおり、PIa~PIdの別に分類して分析する。P条件においては、1セッション平均、PIaが46.25回(総計185回、P条件において記録された全PIの91.6%)、PIbが2.25回(総計9回、4.5%)、

表15 PIa~PIdの出現数 (1セッション平均)

PI ユニット	P条件	NP条件	O条件
PIa	46.25	71.00	35.0
PIb	2.25	6.25	19.0
PIc	1.75	9.50	12.0
PId	0.25	0.75	1.0
計	50.50	87.50	67.0

PIcが1.75回(総計7回、3.5%)、PIdが0.25回(総計1回、0.5%)であった。NP条件においては、1セッション平均、PIaが71.00回(総計284回、NP条件において記録された全PIの81.1%)、PIbが6.25回(総計25回、7.1%)、PIcが9.50回(総計38回、10.9%)、PIdが0.75回(総計3回0.9%)であった。O条件においては、1セッション平均、PIaが35.0回(総計70回、O条件において記録された全PIの52.2%)、PIbが19.0回(総計38回、28.4%)、PIcが12.0回(総計24回、9.0%)、PIdが1.0回(総計2回、1.5%)であった。P条件においても、NP条件においても、PIのほとんどは、双方ともに相互作用の明確な意図を持たないPIaに占められているが、NP条件の方が長いPIの占める割合がいく分高いことがわかる($\chi^2=11.960$, $df=3$, $P<0.1$)。尚O条件における結果は参考のために表15に併記しておくにとどめることとする。

以上の結果から、生後18カ月の時点において、P条件ではpeer間の相互作用は非常に起こりにくく、前相互作用もほとんどが非常に短い段階にとどまることがわかった。それに対して、NP条件やO条件ではいくつかの長い相互作用が観察されたことから、生後18カ月時の幼児でも、相互作用に都合のよい場面条件が整っている場合には、長い間継続した相互作用が生起する可能性が有ることが裏付けられた。

2. 相互作用の成立

前項では相互作用ユニットを分析の対象としたが、ここではさらに相互作用が成立するための条件を見出すために、相互作用ユニットを構成する相互作用行動についての分析を行う。相互作用ユニットの最初のinitiative行動(すなわち開始行動)、終結行動、及び意図的相互作用対の分析は、場面条件による差異を問題とする。

a. 相互作用ユニットの最初のInitiative行動

相互作用ユニット(PI, IA双方を含む)を開始行動の種類によって、表16のように分類すると、以下のような結果が得られた。即ち、P条件において、I₁行動が契機になって起こった相互作用ユニット数は1セッション平

表 16 相互作用ユニットの最初の Initiative 行動 (1セッション平均)

Initiative 行動	P 条件	NP 条件	O 条件
I ₁	27.25	30.50	29.0
I ₂	21.00	50.25	26.0
I ₃	3.00	11.50	28.5
合計	51.25	92.25	83.5

均27.25回(総計109回, 全相互作用ユニットの53.2%), I₂ 行動が21.00回(総計84回, 41.0%), I₃ 行動が3.00回(総計12回, 5.9%)であった。NP条件においては, I₁ 行動が1セッション平均30.50回(総計122回, 33.1%), I₂ 行動が50.25回(総計201回, 54.5%), I₃ 行動が11.50回(総計46回, 12.5%)であった。O条件においては, I₁ 行動が1セッション平均29.0回(総計58回, 34.7%), I₂ 行動が26.0回(総計52回, 31.1%), I₃ 行動が28.5回(総計57回, 34.1%)であった。I₁ 行動については, P条件, NP条件で1セッションあたりの平均生起数があまり変わらないが, I₂ 行動, I₃ 行動はNP条件の方が多いいことがわかる。さらに, 図3のように出現比率で比較したところ, やはりP条件はNP条件と比較してI₁ の比率が高く, I₂, I₃ の比率が低いことがわかった。これらのことから, NP条件は, 偶発的な initiative 行動(I₁)を生起させる条件としてはP条件と変わらないが, 意図的もしくは, 半意図的で自発的な initiative 行動をP条件よりも生起させ易い場面条件であることが考えられる。尚, O条件における結果は, 参考として図3に併記するとどめることとする。

b. 終結行動

表17-1~3に場面条件別に相互作用ユニットのパターンの1セッションあたりの生起数を示した。特に多く見出されたパターン(1セッションあたり10回以上生起)を挙げると, P条件においては, 開始行動I₁-終結行動R₄([I₁-R₄], 以下準じて略記)24.50回, [I₂-R₁]15.50回である。NP条件においても, P条件と同じパターン

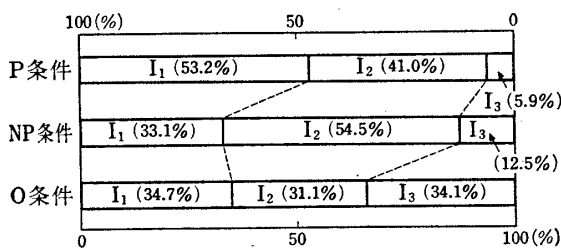


図 3 相互作用ユニットの最初の Initiative 行動の出現比率

が多く見出された([I₁-R₄] 21.00回, [I₂-R₁] 21.75回)が, この他に [I₂-R₂] 15.25回が顕著に多いパターンであった。そこで, 終結行動に着目して, 相互作用ユニットの場面条件の終結パターンの出現比率を比較すると, 表18に示したとおり, P条件とNP条件を比較した場合, P条件の方がNP条件より, R₁とR₄で終結する比率が高く, R₂とR₃で終結する比率が低かった。(ただし, R₁とR₄に関しては, NP条件の方が実数では上まわっており, とりたてて述べるべき事実ではないと思われる。) NP条件がP条件よりR₂行動で上回ったという事実は, 表7で示した通りR₂行動の大半がpeerを注視する行動であったことを考え合わせると, チェックリストの〈視線〉の分析結果とも一致しており, NP条件における視線行動のpeer志向の強さを示すと思われる。R₃行動がNP条件で多く見ら

表 17-1 P条件における相互作用ユニットの出現パターン(1セッション平均)

PI ユニット	I ₁	I ₂	I ₃
パターン 1	/	R ₁ 15.50 R ₂ 1.25	R ₁ 0.75 R ₂ 0.25
パターン 2	R ₃ 1.00 R ₄ 24.50	R ₃ 0.50 R ₄ 3.50	R ₃ 0.50 R ₄ 0.50
パターン 3	R ₁ 1.25 R ₂ —	R ₁ — R ₂ —	R ₁ — R ₂ 0.25
パターン 4	R ₃ — R ₄ 0.50	R ₃ — R ₄ 0.25	/
パターン 5	R ₁ — R ₂ —	R ₁ — R ₂ —	/
PI 計	27.25	21.00	2.25
IA ユニット	I ₁	I ₂	I ₃
パターン 4~6	R ₁ / R ₂ / R ₃ — R ₄ —	R ₁ / R ₂ / R ₃ — R ₄ —	R ₁ — R ₂ — R ₃ — R ₄ 0.50
パターン 7以上	R ₁ — R ₂ — R ₃ — R ₄ —	R ₁ — R ₂ — R ₃ — R ₄ —	R ₁ — R ₂ 0.25 R ₃ — R ₄ —
IA 計	—	—	0.75
総 計	27.25	21.00	3.00

表 17-2 NP 条件における相互作用ユニットの出現パターン (1セッション平均)

PI ユニット	I ₁	I ₂	I ₃
パターン1	/	R ₁ 21.75 R ₂ 15.25	R ₁ 1.00 R ₂ 1.50
パターン2	R ₃ 3.75 R ₄ 21.00	R ₃ 4.25 R ₄ 5.00	R ₃ 0.50 R ₄ 4.50
パターン3	R ₁ 0.75 R ₂ 1.50	R ₁ — R ₂ 1.50	R ₁ 0.25 R ₂ 0.25
パターン4	R ₃ — R ₄ 2.50	R ₃ 0.75 R ₄ 1.25	/
パターン5	R ₁ 0.25 R ₂ —	R ₁ — R ₂ —	/
PI 計	29.75	49.75	8.00
IA ユニット	I ₁	I ₂	I ₃
パターン4~6	R ₁ / R ₂ / R ₃ — R ₄ —	R ₁ / R ₂ / R ₃ — R ₄ —	R ₁ — R ₂ 0.50 R ₃ 0.75 R ₄ 1.00
パターン7以上	R ₁ 0.50 R ₂ — R ₃ — R ₄ 0.25	R ₁ — R ₂ 0.25 R ₃ — R ₄ 0.25	R ₁ 0.25 R ₂ 0.25 R ₃ 0.50 R ₄ 0.25
IA 計	0.75	0.50	3.50
総計	30.50	50.25	11.50

表 17-3 O条件における相互作用ユニットの出現パターン (1セッション平均)

PI ユニット	I ₁	I ₂	I ₃
パターン1	/	R ₁ 13.0 R ₂ 2.5	R ₁ 9.0 R ₂ 0.5
パターン2	R ₃ 1.0 R ₄ 15.0	R ₃ 0.5 R ₄ 3.0	R ₃ 0.5 R ₄ 7.0
パターン3	R ₁ 6.0 R ₂ 1.5	R ₁ 1.0 R ₂ 1.0	R ₁ — R ₂ —
パターン4	R ₃ — R ₄ 2.5	R ₃ 2.0 R ₄ —	/
パターン5	R ₁ — R ₂ 0.5	R ₁ — R ₂ 0.5	/
PI 計	26.5	23.5	17.0
IA ユニット	I ₁	I ₂	I ₃
パターン4~6	R ₁ / R ₂ / R ₃ — R ₄ 0.5	R ₁ / R ₂ / R ₃ — R ₄ 1.0	R ₁ — R ₂ 1.0 R ₃ 2.0 R ₄ 3.0
パターン7以上	R ₁ 0.5 R ₂ — R ₃ 0.5 R ₄ 1.0	R ₁ 0.5 R ₂ — R ₃ 1.0 R ₄ —	R ₁ — R ₂ 0.5 R ₃ 2.5 R ₄ 2.5
IA 計	2.5	2.5	11.5
総計	29.0	26.0	28.5

れたという事実に関する検討は今後の課題であろう。尚、O条件における結果は、参考のために表18に併記するにとどめておく。

c. 意図的相互作用対

記録された相互作用ユニットに含まれている意図的相互作用対のターン数は、図4に示すとおり、P条件においては1セッション平均5.375ターン(総計21.5ターン、0.5~16.0ターン)、NP条件においては1セッション平均35.875ターン(総計143.5ターン、7.5~79ターン)、O条件においては1セッション平均93.75ターン(総計187.5ターン、92.0、95.5ターン)であった。図4によると、P条件の4ペアのうち、3ペアは3.0ターン以下であり、P条件は意図的な相互作用行動が非常に起こりにくい場面条件であることがわかる。又、NP条件においては、ペアによるばらつきは大きい、総じてP条件よりも意図的相互作用対のターン数が多く、意図的相互作用行動

表 18 終結行動の出現比率

終結行動	P条件	NP条件	O条件
R ₁	0.341 *	0.268	0.359
R ₂	0.039 ***	0.228	0.084
R ₃	0.039 ***	0.114	0.132
R ₄	0.580 ***	0.390	0.425

が起こり易い場面であると言えることができる。O条件に関しては分析した2ペアは双方ともP条件、NP条件における各ペアの意図的相互作用対のターン数を大きく上回っており、O条件は少なくとも場合によっては頻りに意図的相互作用行動が生じ得る可能性を持つ場面条件であることがわかる。特にD.M.-N.N.(女兒)ペアは、

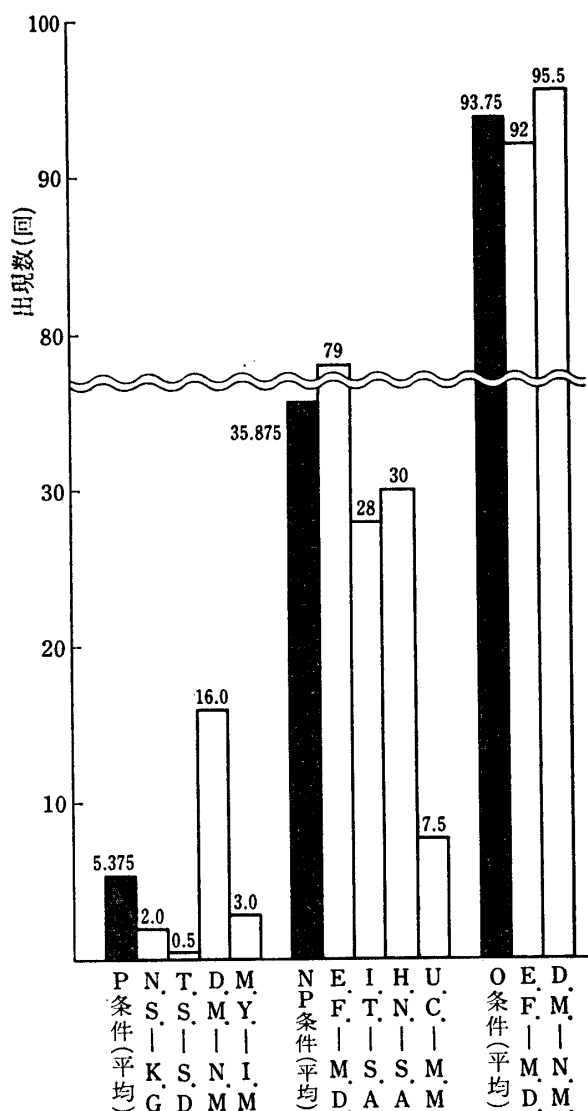


図4 意図的相互作用対出現数(ターン)

P条件においても顕著に意図的相互作用対のターン数が多いペアであるが、O条件においてはP条件の約6倍に及ぶターン数が観察された。

ところで、意図的相互作用対のターン数は、必ずしも相互作用ユニットの数と対応するものではない。例えば、図2と図4を比較対照すると、P条件で相互作用ユニット数が最も多く(66回)記録されたT.S.-S.D.(男児)ペアの意図的相互作用対のターン数は僅かに0.5ターンである。又、それに対して、NP条件において意図的相互作用対のターン数が79と圧倒的に多く記録されたE.F.-M.D.(男児)ペアの相互作用ユニットの数は87回であり、4ペア中少ない方から数えて2番目という結果であった。

意図的相互作用対のターン数は、むしろ相互作用の継続性(どれほど長い相互作用が生起するか)と、前相互

表19 IAに発展した相互作用ユニットの比率

initiative 行動 場面条件	I ₁	I ₂	I ₃
	P条件	—	—
NP条件	0.025	0.010	0.304
O条件	0.086	0.096	0.404

作用行動ではない厳密な意味での相互作用の頻発性(相互作用がどれほど頻繁に生起するか)の双方を合わせて表現する指標であり、言わば相互作用の密度を示すものと考えることができる。この表現を使うとすれば、P条件は非常に相互作用の密度が低い場面条件であると言える。

d. 開始行動の種類と相互作用

開始行動の種類によって、相互作用行動がIAに発展する可能性に相違が見出せるかどうかについて分析する。

表19に示すように、P条件において、I₁, I₂がIAに発展したケースはない。I₃がIAに発展したケースは、全体の0.250(12回中3回)である。NP条件においては、I₁がIAに発展したケースは、全体の0.025(122回中3回)、I₂は0.010(201回中2回)、I₃は0.340(46回中14回)であった。O条件においては、I₁がIAに発展したケースは、全体の0.086(58回中5回)、I₂が0.096(52回中5回)、I₃が0.404(57回中23回)であった。いずれの場面条件においても、I₃がIAに発展したケースの方が、I₁, I₂よりも著しく高い数値を示している。この結果から、相互作用を開始する際に、開始行動を行った者が相手と相互作用を行う意図を持っているかどうかということが、相互作用が成立し、継続するか否かということに重大な役割を担っていると考えることができる。

以上の結果から、生後18カ月の時点において、相互作用を行う意図の有無が、相互作用の成否に大きく関わっている可能性が示唆された。

IV 考察

A 18か月児の Peer Relationship

分析結果の主要点をまとめ、18か月児のpeer relationshipについて考察する。

1. Peer間の相互作用

この時期の相互作用は、「おもちゃを落とす」といった偶発的出来事(I₁)や社会的方向性はあるが、働きかけ意図は明示されない「相手を見る」といった行為(I₂)が、きっかけになって生じることが多く、明確な相互作用

用開始行動 (I₃) が示されるのは14%にすぎない。そのため、相互作用とはいってもその大部分は、前相互作用 PI ユニットの占めており、本来の意味での相互作用の成立と考えられる意図的相互作用 IA ユニットは12%にすぎない。きっかけ及び peer への関心はあっても、それが明確な意図的働きかけでないためにうまく相互交渉につながっていかないのが、この時期の peer 間の相互作用の特徴といえよう。

ただし、出現頻度でみると、明確な開始行動(I₃)は1ペア1セッション平均11.5回、相互作用 (IA ユニット)は9.2回生起しており、この時期にも1分間に一度は意図的働きかけ行動が示され、また同程度の割合で相互交渉が成立していることがわかる。

2. 個別行動

次に、個別行動では、発声は peer より母親へ向けられている。特に発話に限れば peer へ向けられることはほとんどみられない。また、全般的には誰に向けたかが明確でない発声がかなりの割合を占める。接触についても peer より母親への志向性が強く、この時期においては、発声、接触とも peer へ向けての有力な社会的行動となっているとは言い難い。しかし、視線については母親より peer を注視する傾向があり、この時期の peer 行動の有力な手段は視線ということが出来る。ただし toy があれば視線は人より物に向かう。

以上、結果を概括したが、peer 間の相互作用に関しても、個別行動に関しても、場面条件により顕著な相違が示されている。それを次にまとめてみよう。

B 物の存在および種類が Peer Relationship に及ぼす影響

分析結果を場面条件ごとにまとめ、peer 間の相互作用に関するものを表20に、個別行動に関するものを表21に示した。これらをあわせて、各場面条件の特徴を次に示すとともに、18カ月時における peer relationship に及ぼす物の存在・種類 (= 今回の場面条件) の影響について考察する。

1. P条件

他条件と比べて、相互作用生起数が少ない。さらに本来の意味での相互作用の成立と考えられる IA ユニットは1セッション平均僅か0.75回であり、P条件では相互作用が成立しにくいといえる。個別行動をみても、関心が物のみに向かう傾向があり、peer 間の距離も一番離れている。相互作用のきっかけは半分以上が偶発的なもの(I₁)であり、意図的なもの(I₃)はわずか6%にすぎない。ただし、その中には、操作をしてみせる、差し出す、奪う、またその応答としては受けとる、抵抗といったバラエティーに富んだ行動がみられる。このことから、18カ月においては portable toys は、物への興味をひきおこさせ、peer への関心を抑圧し、相互交渉を阻害するが、発達過程の中で高度な相互交渉を引き起こす媒体となりうると思われる。

2. NP条件

P条件に比べ、相互作用数が多い。また、IA ユニットは1セッション平均4.75回であり、NP条件はP条件

表 20 場面条件別相互作用の概要

場面条件	P 条件	NP条件	O 条件
<p>【相互作用ユニットの分析】</p> <p>相互作用ユニットの大部分が PI で占められ、IA に発展した相互作用ユニットは比較的少ないが、長い IA も観察された。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 相互作用ユニットの数は少ない ほとんどの相互作用ユニットが PI で、しかもその大部分は PIa で占められている 長い IA は観察されなかった 	<ul style="list-style-type: none"> 相互作用ユニットの数は P 条件を上回る 相互作用ユニットの大部分は PI であるが、その比率は P 条件ほど高くはない PI の大部分は PIa であるが、P 条件よりも長い PI の比率が高い 長い IA がいくつか観察された 	<ul style="list-style-type: none"> 長い IA がいくつか観察された
<p>【相互作用の成立】</p> <p>意図的相互作用対のターン数は相互作用の密度を示すものと考えられる。又、相互作用開始の意図の有無が相互作用の成否に影響を及ぼしていると考えられる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> I₂, I₃ 行動から始まる相互作用ユニットが少ない NP 条件よりも、R₂, R₃ で終結する相互作用ユニットが著しく少ない 意図的相互作用対が著しく少ない 	<ul style="list-style-type: none"> I₂, I₃ 行動から始まる相互作用ユニットが P 条件と比較すると多い R₂ 行動で終結する相互作用ユニットが多いのは、チェックリストの(視線)の結果と一致していると考えられる 意図的相互作用対は P 条件と比べて多いが、ペアによるばらつきが激しい 	<ul style="list-style-type: none"> 多くの意図的相互作用対が観察された

表 21 場面条件別行動の概要

行動	条件	P 条件	NP条件	O 条件				
【視線】 開眼の占める割合はどの条件でも、一割以下であり、各条件で明確な志向性が示される		物志向（自分—物） 関心が物のみに向かう傾向があり、積極的な物への働きかけが行われる	人（=Peer）志向と物志向の併存 関心が物に Peer に向かう。母親への志向はあまりみられない	人（Peer, 母親）志向 関心は Peer に向けられる。又母親へと向けられることも多い				
【発声】 誰に向けたかが明確でない発声がかかり多く、視線とは違い、志向性は明確でない。また、どの条件でも、発声は Peer へ向けられるより母親へ向けられる		人（=母親）志向 発声の一般的傾向を反映し母親志向がみられる	人（=Peer）志向	人（Peer, 母親）志向				
【顔・表情（快・不快）】 快が生じることは一般に少ない		不快 不快が生じやすい	— 不快は生じにくい	不快と快の併存 不快が生じやすいが、また逆に快も生じやすい				
【手・腕の活動（意図的接触）】 全体として物との接触が多いが、人との接触に限れば、どの条件でもPeerより母親への接触が多い		物志向（反 Peer） Peer への接触はほとんどみられない。またあっても negative な接触に限られる 〔对人的物の使用〕 <table border="1" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>母親</td> <td>Peer</td> </tr> <tr> <td>頻度は多い がレパートリ は少ない</td> <td>頻度は少 ないがレパ ートリは多 い</td> </tr> </table>	母親	Peer	頻度は多い がレパートリ は少ない	頻度は少 ないがレパ ートリは多 い	物志向	人志向 Peer への negative でない接触がみられる。又相互の接触活動がゲームとして成立している
母親	Peer							
頻度は多い がレパートリ は少ない	頻度は少 ないがレパ ートリは多 い							
【全身活動】		—	物を用いた脚・全身活動	物を用いない身体運動				
【姿勢・移動】		停止（坐る） 移動は他条件に比べて非常に少ない	立つ	立つ 母親による姿勢維持がかかり多い。（母親への意図的・無意図的接触を示す）				
【距離】		Peer 間の距離は一番離れている						

に比べて相互作用が成立しやすいといえる。また、相互作用の長さも最大15.5ターンと、長く続く相互作用がみられる。これはNP条件では相互作用が、偶発的きっかけ(I₁)で生じることより、明確な相手への関心(I₂)、意図的な働きかけ(I₃)から始まることと関連していると考えられる。個別行動をみても、P条件とは異なり、関心が物のみに向かうのではなく、peerへも向かっている。

non-portable toys は peer への関心を促すとともに、相互交渉を促進させるといえよう。

3. O条件

NP条件同様、相互作用数が多い。IA ユニット数は1セッション平均16.5回であり、最も相互作用が成立し

やすい。また、相互作用の長さも最大12ターンと、長く続く相互作用がみられる。ただし、今回のO条件の相互作用分析では比較的頻繁に相互作用が見られた2事例の資料のみを扱っていることから、これを結論とすることはできない。ただ全事例の分析を行った個別行動の結果からはO条件では、視線や発声が peer に向けられることも多いが、母親へ向けられることも多い。peer への negative でない接触や、相互の接触ゲームもみられる一方、母親への接触が他条件にくらべ極端に多い。さらに、快も生じやすいが、逆に不快も生じやすい、等の特徴が示されている。このことを考え合わせると、O条件では toy がないために関心が peer へ向き、大いに相

互交渉が起こる場合と、逆に toy の介在がないことで、peer 間の交渉が成立せず、また toy がいないことで遊び自体も制限され、不快が生じるとともにそのはげ口が母親へと向かうといった場合があることが考えられる。

V 今後の課題

今回の分析は18カ月時の peer relations における、相互作用個別行動と相互作用の様相に関するものであったが、すべての問題が吟味し尽くされたとは言えない。その原因は、ひとつには分析資料が収集したデータの一部であったために、必ずしも明確な形で問題が整理されなかったことによる。例えば、O条件における相互作用の様相、母親の介在と peer relationship との関係などが残された資料を分析していくことによって明らかになるであろう。さらにまた、相互作用ユニット同士のつながりについての分析、即ちこの時期における相互作用のテーマの様相を明らかにする課題が残された。逆に、ひとつひとつの相互作用行動の構造を細かく分析することによって、この時期における相互作用行動の構造的特徴を描き出すことも残された課題である。

今後、21カ月、24カ月時点の資料も加えて、これらの諸問題に発達の観点からの分析を加えることが今後の本研究の最も大きな課題である。

付記

1. 本研究では、非常に多くの方々のお世話になりました。家事・育児にお忙しい中、進んでご協力をしてくださいましたお母様方、そしていろいろな事を教えてくれた小さな協力者の皆様に感謝します。また、記録用紙の作製、資料の整理を手伝っていただきました、教育心理学、松岡信也、任其悦両氏、および教育心理学研究室、黒須由美子、山田慶子両氏の御協力を感謝いたします。

2. 本研究は昭和60年度文部省科学研究費（奨励研究(A)課題番号60710047 代表者武井澄江）の補助を受けた。

注

- 1) De Stefano, C.T. & Mueller, E., 1982, Environmental determinants of peer social activity in 18-month-old males. *Infant behavior and development*, 5, 175-183.
- 2) Eckerman, C. O., Whatley, J. L., & Kutz, S. L., 1975, Growth of social play with peers during the second year of life. *Developmental Psychology*, 11, 42-49.
- 3) 江口純代 1979 乳幼児期初期における子ども同士の交渉(その1) 北海道教育大学紀要 29 (2) 161-174。
- 4) Howes, C. & Robenstein, J. L., 1981, Toddler peer behavior in two types of day care. *Infant behavior and development*, 4, 387-393.
- 5) Lewis, M., Young, G., Brooks, J. & Michaelson, L., 1975, The beginning of friendship. In Lewis, M. & Rosenblum, L. A. (Eds.) *Friendship and peer relations*. Wiley. 27-66.
- 6) Lewis, M., & Feiring, C., 1979, The child social network: Social object, social function, and their relationship. In Dewis, M., & Osenblum, L. A. (Eds.) *The child and its family*, Plenum, 9-27.
- 7) Maudry, M., & Nekula, M., 1939, Social relations between children of same age during the first two years of life. *Journal of Genetic Psychology*, 54, 193-215.
- 8) Mueller, E., & Lucas, T., 1975, A developmental analysis of peer interaction among toddlers. In Lewis, M., & Rosenblum, L. A. (Eds.) *Friendship and peer relations*. Wiley, 223-258.
- 9) Mueller, E., & Vandell, D., 1979, Infant-infant interaction. In Osofsky, J. D. (Ed.) *Handbook of infant development*, Wiley, 591-622.
- 10) 大浜幾久子・荻野美佐子・斉藤こずゑ・武井澄江・辰野俊子 1979 言語行動の発達(Ⅰ)——2から17か月児の時間標本法による観察資料の分析, 東大教育学部紀要, 18, 177-199.
- 11) 辰野俊子・斉藤こずゑ・武井澄江・荻野美佐子・大浜幾久子 1980 言語行動の発達(Ⅱ)——玩具を媒介とした母子相互作用 2から17か月児の疑似縦断資料の分析, 東大教育学部紀要19, 35-74.